ドストエフスキーを読む会 報告『罪と罰』第8回

1、2025年12月13日（土）14時～17時
参加者　13名
二次会参加者　8名
報告者　熊谷暢芳さん

内容 『罪と罰』のソーニャ
熊谷さんの報告の要点

1　ソーニャの世界観は「信仰」であり、感情、感性の人である。継母にあたるカテリーナは「正義」の人だが、「世の中すべて正義だけで成り立つわけにいかないことを自分でわからない」。そのことをソーニャは知っているが、カテリーナの視点から行った価値判断を全面的に尊重している。
2　ラスコーリニコフは、自分の世界観の反映に浸って、現実のソーニャにそれ以上のものを見ている。
3　ソーニャは、「人を殺してはいけない」という自分の信仰に基づく価値観によって構成された世界観を持つが、ラスコーリニコフをこのなかに置いていない。
4　シベリアから届くソーニャの手紙は自分の感情の描写は見出されず、現実の状況をただ記述するだけだった。
5　センナや広場でソーニャはラスコーリニコフに自白を強要したが、信仰を勧めていない。それはなぜか？
6　ラスコーリニコフの「いまや、彼女の信念がおれの信念となっていいはずではないのか？すくなくとも彼女の信仰、願望は…」この時点におけるラスコーリニコフの思想の解釈について。

レジュメに沿った参加者の発言、議論をランダムに紹介する。

- 「人類愛を持つ人間」（ラスコーリニコフ）がなぜ人を殺し、自分を傷つけたのだろうか？
- ソーニャはとびぬけた才能を持つ人で、ラスコーリニコフは彼女を尊敬している。
- ソーニャの才能とは、相手の気持ちがわかる人、事実だけを伝え、思い込みのないことを伝えられる人。
- 上記は「共感」であり、共感とは認知的共感と感情的共感があり、認知的共感のほうが優位である。
- ソーニャは身内ともいえるリザヴェータを殺されている。にもかかわらず殺した側のラスコーリニコフを「かわいそうな人」と思っている。これはキリスト者だからか？
- ソーニャ目の前に不幸な人間がいるからあわれむ。ソーニャはラスコーリニコフという人間を自分の中に取り入れている。
- ソーニャはリアリストである。
- ソーニャはリアルにみるとどん底にいる。それなのに他人の不幸が気になる。ラスコーリニコフが不幸な人と思える。これはふつうの人間には無い知恵である。
- 「死者は神に任せよ」というキリストの言葉がある。それよりも人は今を生きる人間を大切にせよということだ。だからソーニャは殺されたリザヴェータよりもラスコーリニコフのほうに気持ちを向かわせている。これはリアルな思想である。
- 自分としては体験的に「共感」はできない。無理である。
- ソーニャは愛の人と言われる。愛とは何か？ロシア正教に基づくものか？
- エピローグの「新しい世界」とは何か？人に興味関心をもって注意を向けられるような世界ではないのか？

2、次回予告
日時：2026年2月14日（土）14時～17時
場所：文京区勤労福祉会館　第3洋室
テキスト：『罪と罰』9回
報告者：梶原公子「気になる二人の脇役」